（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　森山　央朗

10 世紀後半から 13 世紀前半、中央アジア西部からスペインにかけて広がっていた当時の「イスラーム世界」においては、ある都市（地域）に関係した人士の人名録と若干の地誌を内容としながらも、題の上では「都市某（地域某）の歴史」と称するという、独特な類型の書物が大量に編纂された。本研究は、この文献類型を「地方史人名録」と名づけ、この類型に属す諸文献の内容（第 1 部）、編纂者たちの素性と相互関係（第 2 部）、そして編纂者たちが行っていた編纂活動の具体的な様態（第 3 部）を解明することで、この文献類型が「ハディース学文献」、すなわちイスラーム教の預言者ムハンマドの言行録を専門とする学問分野の産物、と捉えられるべきものであることを明らかにする。

地方史人名録は、本研究が対象とする時代の「イスラーム世界」を対象とする研究、なかでもウラマー（イスラーム教の律法・戒律の専門家）研究に多用されてきた。しかし、そうした研究においては、この文献類型の史料的性格には充分な注意が払われないまま、人名録部分に含まれるウラマーの伝記情報がかなり無批判に用いられてきた。一方、人名録部分がハディース学者に偏った内容をもつことは一見すれば明白なので、この文献類型がハディース学と深い関係をもつことは歴史記述論などの研究で簡単に指摘されてはいた。しかし、この文脈においては、ではなぜこれらの文献が都市（地域）単位で編まれねばならなかったのかという問題について、説得的な説明がなされることはなかったのである。

このような中にあって、本研究は、きわめて広い史料的基盤にもとづき地方史人名録の内容的特徴を解明し、その発祥・発展・衰退の過程を描き出しただけではない。本研究は、そうした特徴や過程の背景と原因を、それらの文献を編纂し、読み、自らの著述活動に利用していたハディース学者たちの活動のあり方や世界観という見地から、また同時に、ハディース学がたどった発展と衰退の過程との関連から、整合的に、そして総合的に、説明することに成功している。また、地方史人名録に関する新たな理解を礎にして、ウラマーの姿を独自の視点から逆照射したことも評価できる。このような事情に鑑み、本審査委員会は、本研究が、森山央朗氏に博士（文学）の学位を授与するのにふさわしい高水準の学問的業績であると認めるものである。

もちろん、審査の過程では、内容上（自らの一連の解釈の流れに適合しない周縁的な事象をやや簡単に捨象しがちであることなど）、形式上（アラビア語転写の不備など）の弱点が指摘された。森山氏がそうした指摘を糧にしてさらに研鑽を続けていくことが期待される。